

## ルイ・バザン『中国語口語の一般原理に関する覚え書』を読む

小野 文

### はじめに

この小論は、ルイ・バザン著『中国語口語の一般原理に関する覚え書』*Mémoire sur les principes généraux du chinois vulgaire* (以下『覚え書』と省略)を言語思想史の視点から歴史的に位置づけ、またこれに現代的意味を与えようとする試みである。

ルイ・バザンとはどのような中国学者であったのか。パリ東洋語学校 200 年記念誌によれば<sup>1</sup>、バザン(本名 Antoine-Pierre-Louis Bazin)は 1799 年サン・ブリス(旧セーヌ・オワーズ県)に生まれ、1863 年パリに没している。パリ東洋語学校で 20 数年教鞭を執り、アジア協会の副書記を長らく務めた人物であるが、あまり目立たないように感じるのは、先輩格であり中国学の権威として知られたアベル＝レミュザ(Abel-Remusat :1788-1832)や、同年代のスタニスラス・ジュリアン(Stanislas Julien : 1799-1873)の影に隠れてしまっているためかもしれない。もともとバザンは弁護士として身を立てたあと、中国語の学習を始めている。彼が同い年のスタニスラス・ジュリアンを「私の師」と呼ぶのもそういう訳からである。当時のフランスの中国学者たちは、一度も中国大陸に足を踏み入れることなく、宣教師たちの書いたものから中国語を学び、彼らのもたらした漢籍を読むというのが常であった。それゆえ一般的には中国語の文語研究に向かう研究者が多かったのだが、バザンは、彼自身も中国に赴く経験を持たぬまま、中国語の口語を研究対象として選び、また幾つかの文学作品の翻訳を上梓している。実際に中国に出向いた宣教師たちの出版物を丹念に読み、そこから口語に関する一般的事実を汲み出そうとしたバザンの努力の結果が、1845 年に出版されたこの『覚え書』なのである。

しかし今日、この小冊子はどのように読まれるのか。現代の中国語学者の目からみれば、そこには学術上新しいものはなく、むしろ彼らはそこかしこに散りばめられた中国語文法に関する勘違いや誤り、ことばに対する基本的な誤解、分かりにくい音声表記に驚かされるのではないだろうか。『覚え書』出版から数えて 160 年の年月が経ち、中国語に関する知識と学習法がすっかり変わってしまっている今、バザンの望んだようにこの冊子を現代中国語の実際的知識を得るために読もうとする者はいるまい。また『覚

---

<sup>1</sup> *Langues'O, 1795-1995 : deux siècles d'histoire de l'Ecole nationale des langues orientales, textes réunis par Pierre Labrousse, Paris, Edition Hervas, 1995.* なおこの記念誌はルイ・バザンではなく、アントワーヌ・バザンと彼の名を記している。

え書』は、著者自身が中国語や中国文化の直接の観察者ではないのだから、当時の言語状況を知る資料ともなりにくい。しかしながら、『覚え書』は中国語研究の「進歩」を我々に意識させるだけに終わるのではないだろう。過去の言語学資料は一面的な読みを提示するものではない。問いかけによっては、『覚え書』を読むことは、我々がより「正しい知識」を得ようとして取り組む中国語研究、ひいては東洋学そのものが、どのような紆余曲折を経、また数多くの誤謬とその修正の上に成り立っているのかを改めて教えるものとなる。

このように考えたとき、バザンの『覚え書』は、著者が与えたのとは別の意味を持ち始める。彼の同時代の中国学者たちが創り上げた「中国語」と呼ばれているものの形象を取り出すこと、またバザンの用いている資料体(宣教師たちの書いた資料、彼らが持ち帰った資料、当時の言語学の著作など)が、この想像にどのように形を与え、ひとつの構造体を造り上げたのかを明るみに出すことが重要になるのである。『覚え書』はバザンがどのような資料に寄り頼んで自らの研究対象を作りあげたのか——本文では、アベル＝レミュザを始め、マーシュマン、カルリー、ウェルス＝ウィリアムズ、ギュツラフ等が引用されている(表1参照)——を示唆すると共に、当時の中国語学の思想的背景をもかいま見せてくれる。また19世紀中葉のフランスの中国学が対象としていた「中国語」という言語が、どのように我々の考える「中国語」と繋がり、また断絶しているのかという問題を我々に投げかける。

上に挙げたような問題の全ての側面をここで検討できるわけではない。以下の小論では、まず19世紀フランスにおける中国学の素描を試みたあと、バザンが展開する中国語の「音形」問題を検討する。そのうえでバザンの言語学を一つの区切り、二つの時代の狭間にあるものとして提示しようと思う。

## 1. フランスにおける中国学

19世紀はヨーロッパにおいて東洋学が学問体系に確固とした地位を獲得する世紀であり、パリ東洋語学校の設立と拡張はその一つの顕れである。ナポレオンの命により18世紀末に翻訳・通訳者養成所として立てられたこの学校は、北アフリカのアラブ諸国からインドシナに到る「東洋」遠征を企てたフランスの植民地主義と密接に関わりながら、成長を遂げることになる。『オリエンタリズム』のなかでエドワード・サイードが明らかにしているように、フランス東洋学の確立に大きな貢献を果たすのが、東洋学の「自覚的な創始者」<sup>2</sup>シルヴェストル・ド・サシ(Sylvestre de Sacy : 1758-1837)であって、この人物は、アラビア語の専門家としてのみならず東洋学の中核として、さらには金石文芸アカデミーの会長となって活躍するに到る。

このシルヴェストル・ド・サシの庇護を受け、19世紀初頭のヨーロッパ中国学を先導していくのがジャン＝ピエール・アベル＝レミュザである。彼はド・サシの推薦で、1814年コレージュ・ロワイヤル(後のコレージュ・ド・フランス)初の中国語講座を担当することになるのを皮切りに、徐々にフランス東洋学における中心人物となっていく。1822年にサン＝マルタン、クラブロートらを協力者として設立するアジア協会

<sup>2</sup> エドワード・W・サイード、『オリエンタリズム』、上巻、平凡社、1993年(英語初版1978年)、290頁。

(Société Asiatique)は、ヨーロッパの東洋学の組織としては最も早くに設立されたものであり、その機関誌『アジア学報』*Journal Asiatique* と共に長らくその名声を誇るものとなった。しばしば彼が「ヨーロッパにおける中国学の創立者」と呼ばれるのも、このような理由からである。

科学史・言語思想史のシルヴァン・オルーによると、ひとつの学問が科学的なそれとして成り立つためには、3つの構成要素が必要だという。一つは理論的要素(データ、諸概念、問題)、もう一つは実践的要素(関心と追求される目的)、最後に社会的要素(制度、情報の流通、研究者の養成とその後の進路の確保)である<sup>3</sup>。これを19世紀フランスの中国学に当てはめてみれば、この学問がアベル＝レミュザの時代、すなわち19世紀初頭に、科学的分野として成立していたことが分かる。理論的要素としては、すでに17世紀から宣教師たちが蓄積してきた資料があり、それをめぐって理論的・哲学的議論も17-18世紀を通して行われている。実践的要素にしても、中国人をキリスト教化するという宗教的目的のみならず、ついには中国を五港開港に至らしめる諸外国の政策も手伝って、中国語を習得するという要請が高まったことは疑いない。社会的要素については、すでに述べたようにアベル＝レミュザの時代に「中国語」あるいは「中国文化」は専門家によって研究・教授されるべき対象となったのであり、フランスはいわばヨーロッパにおける中国学のメッカとして、以後も研究者や学生を集めることになる。よってバザンやスタニスラス・ジュリアンが活躍した時代、19世紀中葉には、フランスの中国学はすでに整えられたディンプリンと組織を為して、他のヨーロッパ諸国にもその名を知られていたと言ってよい。

ここでもう少し詳しく、アベル＝レミュザの時代に中国語がどのような議論を提供していたのか検討する必要があるだろう。

18世紀は中国伝道の宣教師たちの書簡集が矢継ぎ早に出版され、中国語の提示する言語学的問題というものが程度まで明確にヨーロッパの言語学者・思想家たちに意識されていた。こうした書簡集は、中国学者のみならず当時の知識人に非常に興味をもって読まれていたのである。ここでそのように公刊された書簡のなかから、ある宣教師の嘆きを引用してみよう。

中国語は大変難しいものです。確言しますが、それはどんな言語にも似ておりません。同じ語が一つの語尾しか持たないのです。つまり我々の言語が区別する、事物の性や数というものが全く見当たりません。動詞においては、行為の主である人が誰なのか、どのように、またどのような時制でその人物が行為をとるのかという判断を助けてくれるものは全くありません。一言でいえば、中国語では、ある一つの同じ語が、名詞であり、形容詞、動詞、副詞であり、単数、複数であり、男性、女性等々であるのです。それを聴き、状況を窺い、推察するのはあなた自身なのです<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> Sylvain Auroux, « Linguistique et anthropologie en France (1600-1900) », in Britta Rupp-Eisenreich (éd.), *Histoires de l'anthropologie : XVI-XIX siècle*, Paris, Klincksieck, 1984, pp. 291-318.

<sup>4</sup> I. et J.-L. Vissière (éds), *Lettres édifiantes et curieuses de Chine par des missionnaires jésuites (1702-1776)*, Paris, Flammarion, 1979, p. 468.

この文章は、当時の宣教師たちの困惑をうまく描写していると同時に、中国語が西洋文法に突きつけた問いの所在を示している。西洋の伝統文法においては、ある例文を取り扱う際、各語がもつ文法カテゴリーや語順などを分析し、そこから意味を引き出すことができる。ところが中国語では事情が異なる。当時の第一級の言語学者であり、アジア諸言語にも強い興味を示していたヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt : 1767-1835)は以下のような観察を残している。

全ての言語において、文脈の意味というものは多かれ少なかれ文法を裏付けるためにあるものだ。中国語においては、文脈の意味は理解の基礎であり、文法的構成はしばしばそこから推論される。動詞でさえ、その動詞的意味からしか、それと分らないのだ。[西洋の]古典語において用いられた方法、すなわち文法を調べたり構成を検討する前に単語を辞書で調べるというようなやり方は、中国語には決して適用できない。語の集まりの示すところから常に始めなければならない。しかしこの示すところが分かりさえすれば、中国語の文章はもはや多義構文とはならない<sup>5</sup>。

フンボルトは中国語という言語が「文法分析」ではなく、「解釈」を中心課題とすることを理解している。それはまた、中国語が西洋言語とは別の論理、別の思考を持っていることを理解することでもある。各言語にそれぞれの言語形式(Sprachform)があると主張するフンボルトにとって、この形式に「文法」がどの程度関わるのかという本質的な問題に気づききっかけを与えたのが、中国語であったと言えよう。

フンボルトはアベル＝レミュザと書簡を交わし、彼との議論のなかで中国語に関する思想を加筆修正していくのだが、その議論の一つの核を形成しているのが、中国語の書記体系の問題である。この問題は、上に挙げた「意味解釈」の問題と共に、18世紀から19世紀初頭の中国語に関する思想の重要なキーワードでもある。フンボルトがむしろ漢字を音声的なシステムと捉えるのに対し、公開書簡のなかでアベル＝レミュザはそれを頑なに否定し、次のように述べている。

私は形声文字の発明が中国語を実に貧しい状態に留めてしまったと思っている。これがその規則的・方法的な構成により、書記体系を傑出した記号で豊かにしているとしてもである。文字の組み合わせによって、中国語は、音のハーモニーと多様性こそ得られなかったが、思想の表現と自然事物の分類に見事に適した書記体系の利点を獲得したのである<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> Jean Rousseau et Denis Thouard (éds), *Lettres édifiantes et curieuses sur la langue chinoise, Humboldt/Abel-Rémusat (1821-1831)*, Lille, Septentrion, 1999, p. 149.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 195.

こうしたアベル＝レミュザの書記体系擁護の背景には、18世紀に盛んであった「像からなる完全言語」の探求と、自然事物の分類という思想が見て取れる。レミュザはまたこうも述べている。「[漢字の]形態は奇妙である。しかしそれゆえに、これを分解することを知れば、より簡単に記憶に刻み込めるのだ。漢字は音の代わりに事物を描いている。だからこそ、一般に信じられているのとは反対に、よく、また沢山覚えることができる<sup>7</sup>。」「前書き」でこう述べたあと、レミュザは彼の文法序説をまさに書記体系の説明——しかも象形文字の説明——から始めるのである。

こうした中国語の書記体系への過度の関心は、18世紀、19世紀前半を通じて中国語にある一つのイデオロギーを与えていたと思われる。それは中国語を、その書記体系の象徴性・図像性から、事物配列を呈する一つの哲学的言語と見なす考え方である。エジプトの書記体系と同一起源を持つように考えられた中国語の書記体系は、その古さの故に、またそれが独自の哲学・文学・科学の書物を多く残す故に、一つのユートピア言語のように想像されていたのである。そこまでの期待をかけずとも、中国語の象徴性・図像性は知識人の驚嘆を呼んでいた。デイドロとダランベールによる『百科事典』の中の「中国語の書記体系」の項は、当時の思潮を反映して次のように記している。

[...]マルティーニ、マガイヤン、ゴービル、セムドという神父たち(ここにフルモン氏も付け加えなければならないが)の証言により、中国人が、絵画が眼前に描けるような事物に対してはイメージを用い、そうでない事物に対してはアレゴリーや暗示によって象徴を用いるということは、証明されたようである。今引用したような著者たちによれば、中国人は、形を持っているものには、表象的文字を持っており、そうでないものには、恣意的象徴を持っていたということになる<sup>8</sup>。

アベル＝レミュザの著作が色濃く反映しているのは、この18世紀に属する思考であり、彼にとって中国語の優位性というものは、とりわけ書記体系の中に存在するのである。

## 2. 「<sup>フォネティック</sup>音形」の問題

アベル＝レミュザは1832年に早逝するが、この強大な影響力を持った中国学者の思想は死後も長らく権威を持ち続ける。その権威に批判の矛先を向けるのが、バザンの『覚え書』であり、二人の対立の結構を如実に示してみせるのが、『覚え書』第2セクションで詳しく取り上げられている「フォネティック」である。まずこの語にどのような意味を与えることができるのか、考えてみたい。

フランス語の単語 « phonétique » は、現在ではふつう形容詞として「音的」を意味し、また女性名詞形

<sup>7</sup> Abel-Rémusat, *Eléments de la grammaire chinoise*, nouvelle édition, Paris, Maisonneuve et C<sup>ie</sup>, 1857, p. xxviii. (Première édition : 1822).

<sup>8</sup> Diderot et D'Alembert, *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des arts et des métiers*, New York, Pergamon, 1969 [1762-1777]. 中国・エジプトの文字に関する記事、また「言語 langue」や「象徴 symbole」の記事は、シュヴァリエ・ド・ジョクール (Chevalier de Jaucourt : 1704-1779) が執筆している。

としては「音声学」という言語学の一分野の名称になっている。しかしバザンの時代にこの語が同じような意味価値を持っていたとは考えにくい。ワルトブルグの語源辞典によると、「phonétique」という単語は19世紀初頭の新語である。ギリシア語のphonetikosから発するこの語は、イギリスにおいて「(アルファベットの綴りに関係なく)発音をあらわすもの」への形容詞「phonetic」として用いられ、そこから現在の音声学もしくは音韻論を指すものとして名詞形「phonetics」が生まれ、その後フランス語にも導入されたようだ。女性名詞の「音声学」という意味がフランスで確認されるのは、19世紀後半となる1868年である<sup>9</sup>。一方、『覚え書』のなかの「phonétique」は学問分野を指しているのではない。よってバザンが1845年に用いている名詞としての「phonétique」は特殊な用法であり、考慮が必要である。

ここで英語のほうに目を投じて見ると、名詞形「phonetic」のより詳しい説明が得られる。オックスフォード英語辞典(OED)は、この名詞形に特別に一項を割き、次のような説明を載せている。「それ自体も字であるような、漢字の一部分であり、漢字自体がもつ同一性や音の親近性に従って、新しい漢字を作るのに用いられる」。その最初の文例として OED が引いているのは、ジョゼフ＝マリー・カルリー(Joseph-marie Callery :1810-1862)の『中国語百科事典』*Encyclopedia of the Chinese Language* (1842)であるが<sup>10</sup>、カルリーといえば『覚え書』のなかでもその『中国語書記法の音声システム』*Systema phoneticum scripturae sinicae* が頻繁に参照されている著者である。このカルリーの辞書 *Encyclopedia* は、同年フランス語でも出版されている。フランス語の語源辞典に記載はないが、このカルリーの用法が「phonétique (phonetic)」という語をフランスの中国語学に導入したことはほぼ間違いないであろうし、バザンの「phonétique」の用法もここから来ているのだと推察できる。

カルリーの著書については後にもう少し詳しく見ることにして、まずバザンの「phonétique」の定義を検討してみよう。

フォネティークとは何であろうか。

それは、言葉との関係において言えば、文字の根本的な部分であって、音を表わす記号である。フォネティーク、それは発音する声、中国語の書記体系の音声的要素である。(原文 29-30 頁)

バザンは辞書編纂の立場から「部首システム」と「フォネティーク・システム」を分けて、後者のシステムを称揚している。それからすると、「フォネティーク・システム」が現在の「ピンイン」や「音素」と同じようなものではないかという推察もできよう。しかし「フォネティーク」の概念が、現在我々の持つメタ言語の概念

<sup>9</sup> W. von Wartburg, *Französisches Etymologisches Wörterbuch*, Basel, Zbinden & Co., 1958. なお19世紀当時「音声学」と呼ばれるものは、綴り字改良問題に密接に結びついている。

<sup>10</sup> 引かれているのは次の文章である。「The phonetic is in itself one of the characters of primitive fonction, which cannot be annexed to any of the preceding orders, and which must therefore be looked on as indivisible». 引用は Callery, *Encyclopedia of the Chinese Language*, p.3 より。

とびったり重ならないことは、以下の叙述からも明らかである。

フォネティックは複数の線によって形作られる(27頁)。

漢字一字の中に、二つの部分(部首とフォネティック)がある(29頁)。

フォネティックはよって「思考を表す部首」と対峙するように、音を表す形として捉えられているのである<sup>11</sup>。

この「音を表す形」、すなわち音形は、バザンの言語思想の曖昧さを示すものとして現れてくる。例えば『覚え書』において、「<sup>フォネティック</sup>音形」は「語根」と明確に区別されていない。バザンは「ほとんど全ての語根は音形としても用いられる(p.25)」と述べているからだ。彼は別のところで「語根」を「部首」と同じものとしているのだから、これは奇妙なことになる。一方でバザンは音形の存在を強調し、部首との差異化を測りながら、もう一方では部首と音形の役割が交換可能であるかのような説明をしているのである。結局、境界が曖昧な「語根(部首)」と「音形」は、バザンによってそれぞれ表意文字的、表音文字的とされ、「属 genre」「種 espèce」というレッテルまで貼られてしまうのだ。

言語学史的な観点から見れば、19世紀において言語学概念を説明する際に生物学的用語が出てくるのにはさほど驚かされない。この時代の言語学用語は、動植物を記述するかのよう言語を記述しようとしたため、生物学から多くを借りていたのである。しかしそのようなありきりの解釈を拒む論理が『覚え書』のなかにはある。もう少し詳しく見てみよう。「属」はふつう、「種」の上位分類とされる。もし語根が「属」であるとするなら、「種」である音形はそれに従属する概念としてあるはずだ。バザンは同じところで語根を「文字の理性」とまで呼んで、その重要性を指摘している。(それに対して音形が文字の何であるのか——身体なのか、情熱なのか——は明らかにされていない)。つまり、文字の理知的部分は語根であり、語根は音形よりも上位概念としてあるのだ。ところがバザンは別のところで「音形」を話し言葉との関係で捉えれば「根本的な部分」と書いている。語根と音形、そのどちらが主要な部分なのか、あるいはその重要性は「書き言葉」と「話し言葉」で分かれるのか、バザンの文章は結局決定的な答えを出していない。この語根と音形の議論については、『覚え書』の背景を検討することが必要であるようだ。

実際、ここには二つの説明論理が働いているだけではない。19世紀中国語学の二つのアプローチの勢力関係が問題になっているのである。次のセクションでは、バザンの言語学をフランス中国学の流れの中に置き直し、そのせめぎ合いの内実に迫ってみたい。

<sup>11</sup> 従って拙訳のなかでは「音声を表す形」という意味で「音形」と訳した。以下の文章でも同様である。この「音形」の概念を持っていなかったアベル＝レミュザは、漢字の一部に音を表す文字のあることを認め、形聲文字 (figurant le son: 音を形どるもの) と説明している (Cf. *Elemens*, p.3)。実際にはバザンの「音形」は現代の中国語学者が述べる「発音音符」(これに偏旁を添えて形声文字が作られる) に等しい (藤堂明保「漢字概説」『岩波講座日本語／文字』、岩波書店、1977年)。

### 3. 二つのアプローチ

言語学史家のジャン＝クロード・シュヴァリエは 1825 年から 1850 年を、19 世紀言語思想史の「中間期」と名づけている。そこには一世を風靡するような目立った著作が欠けているからであり、さまざまな断片的な思想が存在した期間でもあるからだ<sup>12</sup>。しかし一方では 18 世紀中葉に遡る二つの問題圏がこの時期にも未だ生き延びている。一つはヨーロッパ諸語の類縁関係という問題であり、もう一つは発話分析に関する文法と論理の関係という問題である。中国語学もこの二つの問題圏の影響を受けるばかりでなく、それに積極的に関わっている。アベル＝レミュザがフンボルトと交わした往復書簡は、中国語が比較言語学や類型論に与えた課題の大きさを窺わせるし、バザンの『覚え書』の中にはボゼの一般文法の影響が感じられる<sup>13</sup>。よって中国語研究という分野は、この時代の比較言語学や一般文法と切り離されているわけではない。しかしながらバザンの『覚え書』は、そうした言語思想の問題圏とは別のところ、すなわちヨーロッパの中国語学の枠組みの中でも、「中間期」「移行期」とでも呼べるような時期が来ているのだということを匂わせている。

具体的な一例を提供してくれるのは、先ほどの「音形」問題である。バザンが声高に批判するアベル＝レミュザの『漢文啓蒙』(1822)は、中国語の書記体系について次のように断言している。「彼ら[中国人]の書記体系の記号は、一般的に、発音を表さず、思考を表す」(原文 1 頁)。これに対して、バザンはカルリーを持ち出しながら次のように反撃する。「確かにアベル＝レミュザ氏の権威はたいへん重みのあるものだ。だが今日、カルリー氏の『中国語書記法の音声システム』*Systema phoneticum scripturæ sinicæ* が出版された後では、誰が中国語の文字は思想しか表さないなどという考えを支持しえようか」(28 頁)。このバザンの言は 1845 年という日付を持つものだが、その 12 年後のレオン・ド・ロスニーによる「中国語の音形について」という論考は、同じような考えを述べているにも拘わらず、一つの時代の終わりを完全に告げるものとして現れる<sup>14</sup>。この論考は、先のアベル＝レミュザの『漢文啓蒙』の附論として世に出るからだ。ここでド・ロスニーは音形の定義を「象形的・表意的な書記体系にあって、話し言葉の音を表すのに用いられる記号」としたあと、次のように宣言する。「この機会に強調しておきたいのだが、中国語書記体系の音声部分は、象徴的な部分よりずっと重要な役割を果たしている」(235 頁)。これはアベル＝レミュザが著作の第 1 頁で述べることに相反してしまう内容である。すでに述べたように、アベル＝レミュザは「中国の文字は思想を表す」と明言していたからである。このように『漢文啓蒙』は、1857 年に再版される際に、本文に逆らうような内容の附論を添えられることになる。これが示すところは、1857 年にはアベル＝レミュザが生前発したような書記体系に関する言説は既に受け入れられなくなっていた

<sup>12</sup> Jean-Claude Chevalier, 1986, « Une époque intermédiaire. 1825-1850 », in S. Delesalle et J.-Cl. Chevalier, *La linguistique, la grammaire et l'école 1750-1914*, Paris, Armand Colin, pp. 163-165.

<sup>13</sup> 中国語学者以外でバザンの引用する言語学者は、『一般文法』*Grammaire Générale* (1767) を著したニコラ・ボゼ (Nicolas Beauzée : 1717-1789) のみである。

<sup>14</sup> Léon de Rosny, 1857, « Des phonétiques chinois », in Abel-Rémusat, *Elémens de la grammaire chinoise*, nouvelle édition, Paris, Maisonneuve et C<sup>ie</sup>, 1857, pp. 213-235.



ということだろう。ド・ロスニーはこの先達の「誤り」を救うかのように、カルリーの著作に倣った「音形表」まで補足している。

このような移行をうながしているのが、先に紹介したカルリーの *Systema phoneticum* であるということは、バザンやド・ロスニーの言からも明らかである。1841年にマカオで出版されているこの著作は、革新的とも言える音声システムを提示しているのだが、この発表の引き金となるのは、中国語口語研究の進歩ではなく、古代エジプト語研究であるようだ。彼は「前書き」冒頭に次のように述べている。

これまで象徴記号として捉えられてきたエジプトの神聖文字が、「音声」記号、すなわちことばのいろいろな音を表すのに用いられる記号にすぎないと、名高いシャンポリオンの仕事ははっきりと証明することがなかったら、私もおそらくか弱い声を思い切っただけで、「漢字もまたその多くは音声文字でしかあらず、ことばの音に密接に結びついているのであり、これまで一般的に信じられてきたように、象徴的な、また表意的な記号ではないのだ」ということを世の学者たちに向かって言うこともなかったろう。（前書き i 頁）

エジプト神聖文字と中国文字の親近性がすでに前世紀から何度も主張されていただけに、エジプトの象形文字が象徴ではなく音を表すのだとしたシャンポリオンの発見（1822年）は、中国語学にも少なからぬ衝撃を与えたに違いない。しかしカルリーの著作がシャンポリオンの発見からほぼ20年後に出版されていることに注意したい。「中国の文字は思想を表す」という考え方から、中国語学がゆっくと逃れはじめるには、それだけの準備期間が必要だったのであろうか。

ヨーロッパの中国語学が「移行期」にあったことを示すもう一つの例として、バザンが引いている欧米人の資料を一覧してみよう（別表1参照）。『覚え書』のなかで、バザンはカトリック宣教師、プロテスタント宣教師、外交官、そして中国学者の著作を混在させて利用しているのだが、なかでもプロテスタント宣教師の口語研究のものが豊富である。『覚え書』の中では、それらは好意的に参照されている。バザンが『覚え書』を書いている時代は、プロテスタント宣教師が伝道を始め、中国が諸外国に門戸を開いたばかりの時期である。バザンはいち早くプロテスタント宣教師の書いたものを著作に取り入れていると言っても過言ではない。資料体の面から見ても、『覚え書』は中国語学が新しい要素を取り入れつつあることを表している。

アンリ・コルディエの書誌情報などから明らかなのは、フランスではこの1845年を境として、中国語の「会話集」や「対話集」という、口語学習のための教科書が出版され始めるということである<sup>15</sup>。1860年代に入ると、より細分化された「商人のための」「軍人のための」「旅行者のための」会話マニュアルが登場する。確かにこうした口語研究の興隆の理由としては、プロテスタント宣教師の伝道方針や、あるいは五

<sup>15</sup> マカオやマラッカで出版された英米人による会話集の類はもう少し早くからあるが、出版が増加するのは、やはり1840年代からである。

港開港により、中国語を実践的に話し理解するという必要が高まったという事実が挙げられるだろう。しかしそうした中国大陸における西洋人の諸事情と平行する形で、ヨーロッパの中国語学においても、それを受け入れる変化が起き始めていたのではないかと考えられる。それは中国語に思想哲学的な意味づけを与えず、音声的な側面から中国語にアプローチしようという動きである<sup>16</sup>。

数世紀にわたって、中国語(特にその文字体系)はさまざまな文学的・哲学的想像力の源泉になってきた。なかにはキルヒャーのようにエジプトの神聖文字と漢字を同一の源泉をもつものとしたり<sup>17</sup>、あるいは中国語をひとつの普遍的哲学言語になりうるものと考えた思想家たちも登場していた<sup>18</sup>。バザン自身も『覚え書』のなかで、この長く続いた傾向を次のように鋭い言葉で非難している。「決して忘れてはならないのは、中国人の言語と書記体系に関する最もばかげた想像を生み出したのは、この部首のシステムだったということだ」(原文33頁)。漢字という文字のなかに思想の普遍的なカテゴリーを認めること、これはバザンも指摘するように「部首」の視覚的・意味的作用がもたらした弊害とも言える。ここから脱却して、中国学が漢字のもつ音声的作用を強調する潮流は、1940年代からようやく形を取り始めるようだ。プロテスタント宣教師の口語研究や、シャンポリオンの神聖文字解読から少し遅れて、ヨーロッパの中国語研究は漢字に音声的側面を認めはじめるのである<sup>19</sup>。

## 終わりに

この二つの潮流の狭間に位置するバザンの『覚え書』の語りは、今日我々がそれを読むとき、断固とした調子に欠けるように思われる。これには二つの理由が考えられる。一つには、バザンが中国語の口語を扱いながら、自身は中国大陸で生活したことがなく、現地の人々の会話を聞いたこともないということが挙げられる。宣教師のもたらした資料からのみ中国語を学ぶバザンは、アベル＝レミュザの研究対象である中国語の文語や、過ぎ去った時代の中国語の研究から距離を置こうと努力し、「現実」の中国語を語ろうとする。しかし所詮、書物からのみの知識には限界があり、彼自身も十分にそれを承知している。またもう一つの理由は、彼の語ろうとしている「現実」の中国語が、現代の我々から見れば、また別の想像体に過ぎないということから来ている。それゆえ『覚え書』の示す中国語は、我々が知る「現実」の中国語とはほど遠いように見えるし、説得力に乏しいのである。

確かに中国語の文法が書かれていく過程を追うことは、何世紀ものあいだにヨーロッパ人の造り上げた「中国語」という多面の想像体の形状変化を追うことに等しい。しかしこの想像体の有様を、それを育

<sup>16</sup> もう一つ付け加えておきたいのは、キリスト教的「意味」の普遍性を信じて数世紀の間中国において布教を続けてきたカトリック宣教師たちが、その「意味」の普遍性を疑いはじめていたことである。

<sup>17</sup> エジプト文字と漢字を結びつける試みは、19世紀を通じて存在していた。アベル＝レミュザやド・ロスニー、ポティエは二つの書記体系の比較考察を行っているし、シャンポリオンから影響を受けたというカレリー自身も、こうした比較に異を唱えていない。

<sup>18</sup> この種の試みが17世紀から18世紀にかけて普遍言語の探求と結びついていたことは周知の事柄である。

<sup>19</sup> しかしその「音声」が依然として「形」に結びついていたということは、先に見た通りである。

てた学者・思想家たちを、笑って済ませられるだろうか。言語研究もまた人文学の一つであり、人間の思考の営みに深く関わっている以上、こうした想像体の形成は避けられないものである。そうするとき、我々は中国語という一言語もまた、ある時代・ある地域の人々の、期待や敬意、不安や蔑みを担っていたのだと理解する。その歴史を問うことは、我々の知の在り方について問いを返すことでもあろう。

この小論では扱うことができなかつたが、19世紀はその終わりに一般言語学の誕生が準備されている世紀でもある。ヨーロッパのアジア言語研究が、一般文法、比較言語学、文献学と交わりながら、この一般言語学の成立にどのように関わっているのか——この疑問に答えていくのは、次からの課題としたい。

表1：『覚え書』の参照する西洋人の著した中国語関係資料<sup>20</sup>

- Amiot, Cibot et quelques autres (Missionnaires de Pékin), 1776-1783, *Les Mémoires concernant l'Histoire, les Sciences, les Arts, les Mœurs, les Usages, etc. des Chinois*, vol.1-9, Paris.
- Ampère, J.-J.-A., 1832, « De la Chine et des travaux de M. Abel Rémusat », *Revue des deux Mondes*, 15 nov. 1832, pp. 373-405.
- Abel-Rémusat, J.-P., 1822, *Éléments de la Grammaire chinoise*, Paris.
- , 1825-1826, *Mélanges asiatiques*, 2 vols., Paris.
- Bridgeman, E. C., 1841, *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*, Macao.
- Callery, J.-M., 1841, *Systema Phonicum Scripturae Sinicae*, Macao.
- \*—, 1842, *Dictionnaire Encyclopédique de la langue chinoise*, Paris. [= Callery, 1842, *The Encyclopedia of the Chinese Language*, London]
- Dyer, S., 1838, *Vocabulary of the Hok-kèen Dialect*, Singapore.
- \*—, *Dyer's Table of the most commun characters*.
- \*Florent, 1844, *Premiers rudiments de la langue chinoise à l'usage des Elèves de l'Ecole des Langues Orientales*, Paris.
- \*Fourmont, S., 1737, *Meditationes sinicae*, Paris.
- \*Gonçalves, J. A., 1829, *Arte China*, Macao.
- Gutzlaff, C. [Philo-Sinensis], 1842, *Notice on Chinese grammar*, Batavia.
- \*Marshman, J., 1814, *Elements of Chinese grammar*, Serampore.
- Medhurst, W. H., 1832, *Dictionary of the Hok-kèen dialect of the Chinese Language*, Macao.
- Prémare, J.-H.-M. de, 1831[1720], *Notitia Linguae Sinicae*, Malacca.

<sup>20</sup> バザンはしばしば著者名のみを引用しているため、どの著作を参照しているのか、不明瞭な場合がある。よって疑いの残る資料については、著者名の前にアスタリスク[\*]印を付けた。

Taberd, J. L., 1838, *Dictionatium Anamitico-Latinum*, Serampore.

Thom, R., 1840, *Æsop's Fables*, Canton.

—, 1843, *Chinese and English Vocabulary*, Canton.

Williams, S. W., 1842, *Easy Lessons in Chinese : or progressive exercises to facilitate the study of that language, especially adapted to the Canton dialect*, Macao.